

紀元1世紀の教会出席全18回

(ロバート・バンクス著、三上章訳)

※リバイバル新聞2006年12月10日号から2007年4月22日号にかけて連載

この文章は、初代教会の様子を現代のクリスチャンに伝えることを目的としており、綿密な考古学的研究の成果によるものです。著者ロバート・バンクス氏はオーストラリア・シドニーにあるマツコーリー大学で教鞭を取る研究者で、聖書研究、クリスチャンのライフスタイル、共同体の形成、信仰と仕事、リーダーシップなどについて著作があります。

(連載第1回は序文とその1を含む)

■序文

紀元1世紀中頃の初期キリスト教会に出席するとは、どのようなことであつたかのか。この短い物語は、それを描写することを試みたものだ。場所はローマを選んだ。当時の日常生活の詳細については、他の場所よりもローマのほうがよく知られているからである。教会の主人役にはアクラとプリスカを選んだ。長年にわたるパウロとの関係から見て、彼らの家の集会は、パウロ書簡が示す線に沿っていた可能性が非常に高いと思われるからである。描写は、何らかの資料に基づくようできただけ努めたつもりである。資料が

ない場合は、想像で空白を埋めざるをえなかったが、抑制を心がけ、自分勝手な解釈にならないよう努めた。

研究資料としては、聖書とそれ以外のローマやギリシャの文献、さらに考古学と碑文の資料を用いた。その多くは、著者が、オーストラリアのシドニーにあるマツコーリー大学で長年にわたって書き上げた長編の研究、「パウロの共同体観——歴史的背景から見た初期の家庭教会 (Home Church)」(1975年、シドニー、アンズイー社)の成果である。この小冊子に示された教会観の根拠となる聖書箇所をお知りになりたい読者は、この本を参照していただきたい。その他の資料研究、特に紀元1世紀のローマの生活に関するものは、南ドイツのチュービンゲン大学での在外研究の機会に行なったものである。「キリスト教起源研究所」の助けで、その研究はやりやすく楽しいものとなった。

物語を準備するにあたりお世話になった多くの人たちに感謝したい。準備期間中あたたかくもてなしてくれたチュービンゲンのキリスト教共同体の兄弟姉妹、特にスコット・バルチャー、史的正確さを点検してくれたシドニーのマツコーリー大学のエドウィン・ジャッジとトム・ヒラード、校正刷りを読んでくれたピーター・ユイール、付録の討論用の問いを作ってくれたキャンベラのクリーブおよびルース・マンテイー、シドニーのジャン・ロルフとハンフリー・バベッジ、そして最後に、励ましや有益な批評と編集の企画をし

てくれたシドニーのヘクサゴン社のケン・ロルフに感謝する。

本書の発行にあたり私がただ一つ願うことは、本書には不十分な点もあろうかと思うが、キリスト者の方々に、かつて教会はどのようなであったかを、そして今もどのようなでありうるかを、いくぶんでも垣間見ていただきたいということである。20世紀を経た今、私たちは活気を失っている。歴史をさかのぼり、初期のキリスト者たちがしたことをつくりまねることはできないにしても、彼らの集会の本質的性格を今世紀にふさわしい仕方で行わすことはできるだろう。その結果、私たちは今のやり方を多くの点で変えなければならなくなるだろうが、それによって得るところは計り知れないであろう。特に私は、教会についてあきらめていた人たちと、キリスト者ではないが求めている一人ひとりのことを考えている。これらの人たちが本書を通して、求めているものをよりはっきりと知り、やがて私と同じように、毎週それを現実に体験できるようになることを願っている。これらのことがすでに現実となっている、世界中に存在する多くの小グループの人たちにこの小さな物語を献げる。

■その1 ユダヤ人夫妻からの招待

私の名前はプブリウスです。正確には、プブリウス・バレリウス・アミキウス・ルルスです。出身はピリピです。ピリピは、マケドニアにある比較的新

しい植民地ですが、マケドニアの土壤にあるにもかかわらず、何から何までローマ風であることを、私は誇らしく思います。

いま私はローマにいて、長年の友であるクレメンスとユーオディアの家にしばらくの間滞在しています。

今日早めに私たちが皆で、近くにある家の夕食に行った際、とても不思議な経験をしましたので、その話をしたいと思います。それというのも、私の友人たちはアクラとプリスカというユダヤ人夫妻から、7日ごとに食事を共にするようにいつも招待されているのです。他に訪問客もいるので、私が出席するのに特別の招待は必要ありませんでした。

(つづく)

■その2 ローマの町

私たちが出かけたのは、午後なかば、3時になる頃でした。ローマでも夏の間は、夕食の始まる時間が一般的に遅くなります。特に、お客がある場合にはそうです。

長い間、広い道を通ってきたので、狭い街路が窮屈に感じられました。なかには幅3メートルにも満たない街路さえありました。しかも、何とも言えないほどのぬかるみで、足もとが不安定でした。ほとんどの人は、すでに仕事を終えていたので、かなり多くの人が辺りにおり、時には進みにくいほどでした。街路はくねくねと曲がっており、わずかばかりの方向感覚もすぐに失ってしまいました。行こうとしている場所を自分で見つける必要がなくて、本当によかったと思います。ほとんどの建物には家屋番号がなく、ほとんどの街路には標識すらないので、初めての人だったら道を探すのにたいへん苦労しただろうと思います。

ローマの町はとても大きくなりました。ここには現在、ゆうに100万人以上が住んでいるでしょう。しかも、人口はたえず増え続けています。世界中の国で、ここに民族共同体を形成していない国は、まずないと思います。ユダヤ人だけでも5万人いると言われています。「ローマはもはや一つの都市ではなく、むしろ、独自の言語、習慣、職業をもつ諸都市の集合体だ」と言ったのは、誰だったでしょうか。

それは経済のためによかったのではないかと思います。彼らの多くが、地元住民に不足していた諸技術を持ち込んでくれたからです。奴隷や自由民の大量流入は、雇用問題を緩和してくれました。もつとも、それが今はやや重荷になっていますが。食糧事情もよくなりました。近頃は、ずいぶん多くの種類が出まわっています。

しかし、文化の観点からは、すべてがごちゃごちゃした感じがします。私は昔の方が好きです。古きよき時代が、本当に一番よかったと思うのです。

アクラとプリスカが住んでいた通りには、ローマの他のほとんどのところと同じように、さまざまな建築様式が入り交じっていました。

かつて、そこはいろいろな物を売る店でいっぱいでした。店主は店の奥か、店の上の狭苦しい屋根裏部屋に住んでいました。その後ティベリウス帝の治世に、それらの大部分が火事で焼け落ちてしまいました。木と碎石とでできたこうした建物でいったん火事が起こると、消火が難しかったのです。

今、焼け残ったわずかな建物が、高くそびえる共同住宅群のそばに立っています。共同住宅群の中には5、6階建てのものもあります。さらに大きな火事の危険があるように思われましたが、それとは別に、建物が崩壊する危険もたえずありました。建物の多くはそれほど建て付けが悪かったのです。

何十年も前から、このような高層住宅がローマ中にそびえています。大部分の人たちは、今もこの形式の住居に

住んでいます。レンガとコンクリート製のもっと高級なタイプの高層住宅の中には、新型の商店街さえ完備しているものもあります。

その区画の一つの端に、一戸建ての家が2軒ありました。町を取り囲む丘の上に見える宮殿ふうの大邸宅ほどではありませんが、それでも住み心地が良さそうな所でした。クレメンスの説明では、2軒のうち、より堂々としている方はいまだに個人の所有で、何世代にもわたって同じ家族のものでした。売却してアパートか下宿にしないかという儲け話があるようですが、現在の所有者たちは断っていました。こういうことは、ますますローマ中に増えているのだと思います。外国人の大量流入と、裕福な市民層における浜辺の豪華な別荘の愛好とがあいまって、こうした変化が起りました。(つづく)

■その3 新しい世界観

もう一つの建物は、事実上、三つのアパートに分割されていました。一つは、敷地の裏側にあるギリシヤ式庭園に面しており、他の二つのうち一方は長方形で、他方はL字形をしたより大きなものですが、それらは表側にあるローマ式の正方形の広間を取り囲んでいました。L字形の方は、通りに面する部屋が店に作りかえられていました。アクラとプリスカが買ったのは、このアパートでした。このような配置のゆえに商売を営むことができると同時に、心地よい一面に住むことができたからです。二つの世界の最善のものを得たと、彼らは言っています。

私たちがアクラとプリスカの家にやってきたとき、店の入口は閉まっており、上下する木製シャッターが入口を通行人の目からさえぎっていました。隣に小さな玄関があり、私たちは通りからそこへ入りました。数歩進むと、アパートの開いたドアのところに来ました。それには、アクラの名と職業を記した小さな看板がついていました。あたりに誰もいなかったのです、クレメンスは何度か戸を叩きました。注意を引くためのドアノックもベルもありませんでした。

「早かったらどうか」

と、彼はユーオディアに聞きました。「そうは思わないわ。たぶん私たちが最初に着いただけなのでしょう」

ほどなく誰かが現われました。やせ気味の中肉中背の男性で、私たちの方

に勢いよく走ってきました。私はあらかじめこのアクラという人物がユダヤ人だと聞いていましたが、別に気になりませんでした。

私たちローマ人は、そういうことは寛容な民です。私はユダヤ人の家庭で食事をしたことはありませんが、ユダヤ人たちとはけっこう仲良くやってきました。彼らはあまり外国人をもてなしません。たぶん彼らの宗教上の規則と関係があるのではないかと思いません。彼らはたいてい自分たちだけで閉じこもります。国外に移住した人たちでさえそうです。昨夜クレメンズから聞いたかぎりでは、この人は多くの点で型破りのユダヤ人であり、普通のユダヤ人よりもはるかに自由なものの見方をする人の方でした。

「この人がそうなのは、ローマ帝国のあちこちを歩き回ったからですか」

と、私はクレメンズに聞きました。

「そういうわけではありません」

と、クレメンズは答えました。

「もつとも、それも少しは関係あるかもしれませんが。本当のところは、彼が新しい世界観を受け入れ、そういったことさらに関するものの見方に影響を受けたからなのです」

* *

つまり、そういうわけだったのです。クレメンズとユーオディアは、アクラとプリスカを通してコリントでこの新しいものの見方に興味を持ち始めました。クレメンズが言うには、彼もユーオディアも、コリント滞在の終わり頃にそれを理解しはじめ、ローマへの移

住を決めた後もその見方を変えなかったというのです。

彼らは最初、ローマへ行くことが難しいと思っていました。ローマに宗教団体の数が足りないということではありません。各団体はその神殿や寺院をもっています。また、十分な数の哲学学派がないということでもありません。そうではなく、クレメンズとユーオディアのものの方が、どちらの部類にも当てはまらないように思われたからです。

ですから、2人の前途がやつと明るくなったのは、アクラとプリスカが再登場したときなのです。この夫婦はコリントやエペソでしていたように、ここでも自分たちの家で定期集会を始めました。私的な宗教団体や哲学者たちの晩餐会については聞いたことがあります。

(つづく)

■その4 熱烈なあいさつ

私的な宗教団体や哲学者たちの晩餐会については聞いたことがあります。もともと、私はそういったものに出席するという危ない特権にあずかったことはありません。クレメンスは、アクラの家の集まりはそういうものとはまったく違うと説明し、ユーオディアも、私が行ってもきつと場違いな感じはしないだろうということを、わざわざ請け合ってくれました。

「それでは、あなたがたの言葉を信じることにしましょう」

と、私は言いました。

* * *

私が来たのはそういうわけでした。緊張気味でしたが、興味もありました。この家の人たちは、常軌を逸して何かにのめりこむようなことのない、かなり分別のある人たちではないかと推測していました。よろしいですか、彼らがギリシヤ人なら、私たちローマ市民の宗教と都市の伝統に根ざす、よきローマ的基盤という利点を持たないので、最近よく見かける秘密主義的で感情を強調する東方のカルトの一つに凝りがちだっただろうと思います。しかし、ユダヤ人であるなら、たとえ典型的なユダヤ人ではなくとも、そのような東方のカルトにかかわることは考えられないでしょう。あまりにも洗練された民族の道徳上の規則や唯一神への頑ななまでの傾倒があるからです。

アクラが現われたとき、彼がドアのところに来るのを待たずに、私の友人

はそのまま中に入り、アクラに会いまわしました。もともと、習慣的というよりはもつと心のこもったものでしたが。

「ようこそ。ようこそ。ようこそ」と、アクラは心から言いました。

「あなたに神の恵みと平安がありますように」

と、クレメンスが答えました。

「また来られてうれしいです」

それから、きわめて異例なことに、アクラはユーオディアを抱きしめ、口づけをしました。2人は兄弟なのではないかと思うでしょう。私たちの詩人マルティアリスなら、これをどのよう表現するだろうかと思わずにはいられませんでした。彼は、ローマの男たちがありとあらゆる機会に口づけを交わす習慣は忌むべきものと見ましたが、私も彼に賛成したくなりました。

* * *

さて、プリスカが部屋に入ってきました。彼女が着ている羊毛のガウンは、色彩は豊かでも飾りつけは質素なものでした。まわりも同じようにあいさつしていました。もうその頃には、私は紹介され、あいさつも受けていたということ、感謝をもって急いで付け加えるのがより正しいでしょう。

「プリウスさん、おいでいただきたいうれしいです。クレメンスとユーオディアから、あなたがおいでになるかもしれないと聞いておりました」

とプリスカは言いました。

それから、私たちは外套を預けた後、サンダルを脱ぎ、用意してもらったスリッパを履きました。また、私たちは、一束の花と持ち寄り用の食事を渡されました。私たちが持つていくようにユーオディアが用意してくれたものです。それから、私たちは話を始めました。アクラは、とても流暢なギリシヤ語でいろいろと話を引き出してくれました。私の最近の旅や、アカヤからの船旅のおりの天候や、ローマ市での私の滞在期間について話しました。

話の中で、彼が若い頃にポントゥスからローマに移住したことを知りました。彼は、過去数十年の間に東方の属州からローマに大量に流れ込んだ何千何万もの移民者の一人でした。やがて彼は天幕作りの商売を確立し、そのおかげで、当地では名の通ったアキリア一族の一員であるプリスカと結婚できたのでした。

(つづく)

■その5 アクラとプリスカ

クラウディウス帝が、ユダヤ人たちが政治的紛争を引き起こすのではないかという疑いをいだいて彼らをローマ市から追放した時、アクラとプリスカは、運悪く困難に陥りました。2人がコリントに移住し、同業のよしみで私の友人クレメンスに出会ったのは、そういう時でした。その後、2人は2、3の町に移住し、エペソのような地にも行きましたが、ローマ市民の動揺が収まったとき、2人はまたここに戻り、もう一度以前の商売を始める決心をしました。彼らはけっこう裕福になっていたので、以前の友人たちのところからほんの二つか三つの通りしか離れていない皮革商業地区の近くに、なんとかこの質素なアパートを買ったのでした。

* * *

ポントゥスに住み始めた頃の生活についてアクラに尋ねたちょうどその時、他の何人かの客が到着したために、私たちの会話はさえぎられました。この人たちは、4人の子どもと、夫が亡くなってから息子夫婦と一緒に暮らしてきた高齢のおばあさんとからなる大家族でした。彼らに紹介されましたが、全員の名前を覚えることはできませんでした。彼らの家はわりあい近くにありました。父親のフィロロゴスは、皮革業関連の書籍販売の仕事をしていました。

私の考えるところでは少々やりすぎているくらいの熱心さで再びあいさつ

が交わされていた間、私がいた広い正方形の部屋をじっくりながめることができました。今や町のこの地域の水道設備は改善されていたので、屋根から流れる雨水を貯めるために以前使われていた中央の井戸は、ただの飾りになっていて、井戸の両側は鉢植えの植物で覆われ、そのため部屋は心地よい室内庭園のように見えました。離れたところにはカーテンが下りている2、3の寝室が見えました。その一つは、家の主人の子どもたちが結婚して家を出ていたので、おそらく客室でした。

アクラとプリスカは客をもてなすことでもとても評判があり、一時にお客を何カ月も泊めることもあるということ、私はユーオディアから聞いていました。室内は涼しく心地のよいものでした。昼下がりの外気は暑かったのですが、その後は涼しく爽やかでした。また、室内は、外の通りの喧噪に比べて、この上もなく静かでした。

私は先ほど着いた家族との話に引き込まれました。話はかなり長い間続きましたが、そのうちさらに2人の客が着きました。高価そうな軽い長衣を着た高貴な感じの紳士と、その人の奴隷と見てもさしつかえなさそうな質素な衣を着た同伴者です。明らかに身分が違うのに、あいさつを交わすのにアクラとその妻が差別をしなかったことに、私は驚きました。いや、少しショックを受けました。先に着いていた家族の子どもたちはすぐに私から離れ、その奴隷を取り巻きました。

「リュシナス、リュシナス」

と子どもたちは呼びました。

「はい、はい」

と、彼はわざとこわがるように言いました。

「外国人がローマに攻めてきた、なんて言わないでよ」

子どもたちは彼のことを気に入っているようでした。彼の方も、子どもたちに会えたのがうれしそうで、男の子たちの髪を親しみを込めてもみくちやにしたり、女の子たちの服をほめたりしました。女の子たちは、かかとまで届く白い衣の上にゆったりしたブラウスを着ていました。男の子たちは、年齢にふさわしいベルトの付いた普通の上着を着ていました。(つづく)

■その6 招かれた顔ぶれ

私はじきにその奴隷の主人に紹介されました。彼の名はアリストブローロスといい、かなり責任ある公職についている人でした。その仕事について私たちはしばらく話をしていました。話があまり進まないうちに、アクラが手をたたいて、私たちの注意を引きました。彼は、二つの水時計の一致より2人の哲学者の一致を見いだすことの方がいかにたやすいかという、ありきりの冗談の一つを語りました。他の人から聞いたものなのかもしれないませんが、その冗談を始めたのはセネカだと思えます。

それから彼は、他の客たちがこちらに向かっているところだという知らせを今受け取ったので、食事に備えるため私たちは食堂に移ったほうがよいだろうと言いました。広間から出るとき、私はまたクレメンスとユーオディアと一緒にになりました。

「これから礼拝が始まるのですか」と、私はクレメンスに聞きました。

彼は口元に微笑を浮かべながら、からかうように私を見ました。

「それは、私たちが家に入ったときから始まっていますよ」

と、彼は答えました。そして、彼はそのことを自分で理解するように仕向けました。

* * *

食堂も、先ほどいた広間から離れたところに、ゆったりした大きさを広がっていました。アクラとプリスカはこ

こでも首尾よくやっており、なぜ彼らのところで集会が行なわれるかが分かりました。クレメンスのアパートなら、子どもたちを含めて普通の客を9人入れるのがやっとでしょう。アクラのアパートの初代の持ち主は、食堂の長さはその幅の2倍であるべきだというヴィトルヴィウスの有名な格言に明らかに賛成していたのでしよう。つまり、食堂は、三つ一組の寝椅子を2組置くことができ、最高10人までの大人と、必要ならテーブルの前の空いた場所にある長いすか腰かけに子どもが6人座ることができる広さでした。私たちが入ったとき、プリスカ（または、皆が親しみを込めて呼んだようにプリスキラ）は、私たちを席に案内してくれました。

「プブリウスさん、最初のテーブルを囲む真ん中の寝椅子の一番前に座っていただけですか」

と、彼女は聞きました。

私は間違いではないかと思いました。それはふつう一番大事なお客のためにとっておかれる席だからです。

「ここですか」

私はその席の横に立ち、自信なさそうに聞きました。

彼女がほほえみながらうなずいたので、私は仕方なくその席に着きました。

彼女は私のそばにクレメンスとユーオディアを座らせました。アリストブローロスは、当然私の席に着くべきはずなのに、他ならぬ彼の奴隷と一緒に、あまり重要でない客用の寝椅子に着きました。私は、彼がこのエチケットの

二重違反をどう受け取るかと注目していましたが、気にしない様子でした。

たとえ気にしていたとしても、その憤りをうまく隠していました。私がこれまで行ったことがある食事の席でも、もしこういふことがあれば、彼が憤然として席を立っていくのも当たり前だったでしょう。

彼の向かいにある一番前の寝椅子に、アクラは私を右にして正しく着席しました。プリスカはその隣の席に着きました。部屋のあちらの隅には、もう1組の三つの寝椅子がこちら向きに置いてあったので、互いに相手を見ることができました。

3人の子どもたちは、真ん中にある折りたたみ椅子に座っていました。父母と一番上の男の子は左側の寝椅子に座り、祖母はその向かいにある寝椅子の一番前に座り、一番下の女の子がその隣に座りました。そういうわけで、テーブルの回りには、これから来る客のために十分な席が残っていました。

(つづく)

■その7 食事の始まり

何人かが着きました。ユダヤ人の織工とその妻と魅力的な娘2人が、皆からあいさつを受けながら、他のテーブルの人たちのもとに加わりました。

数歩後ろに自由民が2人おり、彼らは私たちのテーブルの空いている席に着きました。2人とも、この家の主があらかじめテーブルの上に置いておいた贈り物の隣に、自分たちの贈り物を置きました。その自由民の一人ガイユスは、高貴なローマ人からその子どもたちの家庭教師に雇われていました。じつは、彼はその家で生まれたのですが、最近よくあるように、忠実な仕事ぶりが認められ、後に解放されたのでした。主人の希望により、しかしまた自分自身の希望により、彼はその仕事に留まりました。

もう一人の自由民ヘルメスは、主人から解雇され、自活せざるをえない境遇にありました。何カ月も失業状態にあったのに生活することができたのは、ひとえに国の失業手当と、この小さなグループの援助のおかげでした。

* *

アクラは彼らに私を紹介し、その状況を説明した後、立ち上がり、静粛を求めました。

「だいぶ時間が経ちました」

アクラは続けました。

「実際、もう4時半になりましたから、食事にしましょう。フェリクスは今日も主人に引き留められているようで、いつ着くか分かりません。ファイロ

ロゴスさん、彼の分の食事を取っておいていただけますか。そうしないと彼はまったく食事にありつけないことになるでしょう。彼の主人がどういう人物か、皆さんご存知の通りです」

フィロロゴスはうなずき、長男に食事を整えさせました。

私たちが食堂に入ったすぐ後、アリストブローロスの奴隷と、2人の男の子のうち下の方が、プリスカについて部屋から出て行きましたが、今、彼らは最初の食事をもって再び部屋に入ってきました。ユダヤ人織工の2人の娘たちも、台所でプリスカの手伝いをしていました。

食事を始める前に、アクラは、前にあるテーブルに夫人が置いておいた丸いパン——見たところパン屋で買ったものではなく手製でした——を取り、感謝を献げたいと言いました。私は、彼らの神への献げ物の一種だろうと思いました。私たちローマ人はいつも、家の神々のために食べ物と飲み物の一部を取っておき、主な料理を食べた後に、それらを献げ、受け取ってもらうのです。ユダヤ人たちのやり方は違っており、食事の始まりの合図はパンを裂くこととある種の祈りをするのだと、聞いていました。今起こったことは、むしろそのようなことでした。

アクラはその場の人たちに、彼らの神がパンの一部を献げるかわりに、彼らのために身代わりとして何かを献げたことを思い起こさせました。その何かとは、言わずもがな、彼らを生かすために死んだ、神の独り息子です。

次に、アクラが言いました。

「私たちのために自分自身を献げる前に、彼はちょうど私たちが今食べているような食事を、弟子たちと共に食べました。この食事の間に、彼は彼らにパンを与え、それが彼を表わすことを彼らに語りました。ちょうど彼らが体のいのちのためにパンを必要としたのと同じように、本当のいのちを体験するために彼を必要としました。私たちも彼を必要とします。私たちが会食を続けることを彼が望むのはこのためであり、私たちが今日共に集まっているのもこのためです」

(つづく)

■その8 パンを裂くアクラ

死んだ人がいったいどのようなにしてこういったすべてのことをしているのか、私にはさっぱり分かりませんでした。しかし、次にアクラは、この人は処刑された後、本当に生き返ったと言いました。率直に言って、私は耳を疑いましたが、確かに彼はそう言ったのでした。死んだ後、彼は父のところへ行きました。そのことにより、彼は、彼に従う人には誰にでも、どこにいても、どれほど多くの人数であっても、彼のいのちを分け与える地位につきましました。いわば、彼の一部分が彼ら一人ひとりの中に生きています。少なくとも私はそのように理解しました。

「このことの意味は」

アクラは続けました。

「彼は体としてはこの部屋におりませんが、それにもかかわらず、じつは私たちの間にいる、ということなのです。私たちがまずこのパンをもつて食事を共にするとき（彼はパンをちやうどよい大きさに裂き、客たちに与えました）、また食事をしながら互いに交わりをすることを通して、彼を直接に体験するのです」

アクラはこのことの全体を、もしそう呼べるならばですが、短い祈りで結びました。というのも、その祈りは、私の見るかぎりでは、即席のものであり、まったく普通の声で語られたからです。祈りの中で彼は、このことすべてを神に感謝し、どれほどこの食事

とそれに関連するすべてのことを待ち望んでいたかを、神に語りました。その後、彼は「そうです」「本当に」「アーメン」などの唱和に加わり、食事を始めました。

さて、率直に言って、これはまったく思ってもみないことでした。それは、慎み深い儀式でもなく異国風の秘儀でもありませんでした。すべてはとても単純で、本当に平凡でした。私は、このぞんざいでありきたりのやり方を彼らの神はどう思うだろうか、やや思いつきで神を取り扱ってはいまいかと思いました。それは、神に対してふさわしいと思われるやり方ではまったくありませんでした。

* * *

私たちはしばらく食事をしていましたが、アクラが先ほどのおばあさんの方に顔を向けて、聞きました。

「マリヤさん、暑い日が続きますが、いかがお過ごしですか。この暑さは1年のこの時期にしては珍しいです」

アクラは、彼女について私に打ち明けました。

「彼女は最近、最北の地にある丘陵地方、つまり家族全体の郷里からローマに越して来たばかりです。30歳にもかわらず、環境の変化にとてもよく適応しています。何かの皮膚病にかかったため、ときどき具合が悪くなるのです」

彼女は、すぐにそれと分かるその地方の方言で答えました。

「ずっとよくなりました。ありがとうございます、アクラさん。特に先週、皆さんが

私のために祈ってくださいったときからはね」

これがきっかけとなり、ある医薬軟膏の効き目があるのかどうかということと、一般に医者助けには限界があるということが話題になりました。

こういう話が進む間に、私たちは最初の料理を食べ始めました。それは、少しの小麦粉のおかゆで、通常、主食として食べる物です。普通よりもさまざまな薬味——きのこ、オリブ、ハーブ——が添えてあり、はちみつのみで味つけされていました。

「この料理、とてもおいしいです」

と、私はユーオディアに言いました。

「プリスキラの手製の料理です。彼女は、どんな材料を加えたか絶対に教えないでしょう」

(つづく)

■その9 病気に関する議論

その後、私はもっと広いことから関する会話へと導かれました。そのなかで尋ねられたのは、とても多くの奇跡が起こっているときれる東方のいやしの大神殿について、旅行中に話を聞いたことがあるかということでした。

「たくさん聞きました。けれども、ほとんどはこじつけだと思いました。

聞かされたことを自分の目で見るなら、私は信じるでしょう」

と、私は答えておきました。

それから、専門の医療的援助と共同体のいやしの祈りとの関係について、活発な会話が交わされました。その問題に関してとても激しい感情を持つ人たちも何人かいて、一時は口論になるのではないかと思いました。アクラのちよつとした助けにより、しばらくして話は落ち着きましたが、私にもあまりに込み入った話でした。

* * *

私は、アリストブローロスの奴隷が注いでいる一杯目のワインに注意を向けました。杯は、私たちが使っていた皿と同じように陶器製で、上流家庭で見られるような銅製や銀製の食器ではありませんでした。指で扱えない食事の残りもののためには、大きなスプーンがあてがわれました。また、テーブルの上には、食前、食中、食後に手を洗い、指をきれいにするための水を入れた鉢とナプキンがありました。こういった世話は、しばしば奴隷たちが、海綿やワインを使ってするものですが、

ここでは自分でやることになっていました。私たちは、ハエも自分で追い払わなければなりませんでした。ワイン自体は、はちみつよりむしろ水が混合されており、なかなかの質のもので、口に心地よい冷たさでした。

子どもたちは、親たちと同じくらいの量を注いでくれるようにアリストブーロスの奴隷にせがみました。

「お願い、リュシアス」

と、彼らは頼みました。

「分かりました」

と、彼は答えましたが、彼らの求めに応じるふりをしただけでした。

* *

病気に関する論議がおさまり、全員が最初の料理を食べ終えたところで、プリスカが席を立ちました。前に彼女の手伝いをした人たちもついていきました。

こうしている間に、ユーオディアが会話に割り込んできました。

「今週私は、フォルトゥナトゥスから手紙を受け取りました。皆さんによろしくとのことです」

どうやらフォルトゥナトゥスは、数カ月前に私の友人たちと共に短い時を過ごしたようでした。そのときに、彼もまた集会に出席していました。彼は今ミレトスに戻っており、その地の信者たちと深い関わりを持ちました。そしてユーオディアは、彼の近況を伝えるその手紙の数節を読みました。

「私たちからも心からよろしくと言っているとお伝えください」

と、アクラが言いました。

「そして、私たちは彼の祝福を祈り続けているとお伝えください」

他の何人かもこれに同意しうなずきました。

* *

しばらくしてプリスカが戻ってきたとき、私はもう自分の幸運を信じられませんでした。最近ほとんど肉を食べていなかったもので、少し肉を食べたいと思っていました。肉は町中で慢性的に不足しており、一番景気がよいときでもおそろしく高価でした。ところが、ここには各テーブルのために、いろいろな肉の大皿と各種野菜の大皿がありました。今回の食事のために1週間蓄えておいたに違いないと思いました。

当惑しましたが、または私が最初に給仕されました。私は小さな魚とかぶと豆を取り、おいしそうな香りの塩ソースをたっぷりかけました。

(つづく)

■その二〇 洗礼を受けたテュロ

私の席の向かいでは、驚いたことに、アリストブローロスが自分の奴隷の皿に食べ物を盛ってあげているのが見えました。単に盛っただけではなく、自分の皿に盛ったのとまったく同じ品数と量でした。私は、自由民たちでさえ、彼らにまさる招待客より一段劣った食べ物とワインを、さらには異なる食器さえあてがわれるのを見るのにすっかり慣れきっていました。奴隷たちは普通、食堂の外で食事をしました。もっと寛大なやり方をする主人のことはとくきおり耳にしますが、まだ珍しいことです。

* *

食べ始めた時のしばしの沈黙を利用して、アリストブローロスは、今晚のうちに皆に考えてもらいたい問題をリュシアスが持っていると言いました。リュシアスが望むなら今それを進めてもよいと、アクラは手で合図しました。

リュシアスが話を始めようとした、ちやうどその時、外側の広間でサンダルの音がしました。サンダルを脱いで、スリッパに履きかえるときの摩擦音です。それから、一人の青年が戸口に現われました。私たちのほとんどはひげをきれいに剃っていますが、彼はひげをはやしていました。

「ようこそ、フェリクス」

と、アクラは、寝椅子から身ぶりをしながら言いました。

「主人が私を町向こうの野生がちやう狩りに遣わしたせいで、午後の全部を使ってしまいました」

と、その奴隷は、遅れた理由をくどくどと弁解しました。

「そうでしょうとも」

と、アクラは言いました。

「あなたが来る前に始めてしまっすみません。日が暮れてきたのであしからず」

フェリクスは、まだ戸口でためらっていました。

「すみませんがアクラさん、もう一人分、夕食の用意がありますか」

フェリクスが手招きすると、またもや、ひげをはやしたもつと若い男が、おそるおそる入ってきました。

「こちらはテュロです」

と、フェリクスは続けました。

「私が前に話した友人です。私はこれまで何度も彼に、主について話をしてきました。ところが昨夜、町にいたあの説教者、アンドロニコスと彼が話をしていたとき、何度も聞いたことのある話が本当だと突然分かったので。彼はただちにティベル川で洗礼を受けました（私はそれを思うとぞつとしました。ちよつと洗礼の内容を考えてみてください）。それから、彼は仕事が終わると私のところに飛んできて、自分に起こったことを話してくれました。きつと彼をここに連れてきてもかまわないだろうと思ひまして……」

アクラは寝椅子から起き、ただちにその新来者のところへ行き、彼を抱きしめました。

「歓迎するどころの騒ぎではありません」

アクラが続けました。

「大歓迎です。あちらにあなたの席を用意します。ちよつと狭いかもしれませんが、かまいませんね」

プリスカはもうすでに、台所から自分の食べ物を運んでくるところでした。

彼らが席に着くと、

「どうぞごゆっくり召し上がってください」

と、彼女は言いました。

「のちほど、質問の時間が充分あります。ここでは、あなたを他の人たちに紹介するにとどめます。どうぞ召し上がってください」

* *

「さて、リュシアスさん。あなたが言おうとしたことを話してください」

と、アクラは言いました。(つづく)

■その二 自由民になるということ

「はい、本当に困った問題があるのです。というのも、アリストブローロスさんにも関係があることなのです。でも、そのことを皆さんに話すように彼は私を励ましてくれました。その問題とは、アリストブローロスさんが私を解放したいということなのです。この申し出を心から感謝していますが、どうもそれが正しいこととは思われません。お分かりのように、私が彼に仕えるように神が召してくださったと私は確信しておりますし、今のままの方がそれを最もよく行なうことができると思うのです。しかし、彼は私が自由になった方がよいと考え、そうであっても困る理由などないと言っています」

アリストブローロスは同意し、彼の理由を詳しく述べました。続いて、彼とリュシアスにさまざまな質問がなされ、問題がさらに探求されました。実際、議論は、解放か隷属かという全般的問題から始まりました。2人の自由民は、それぞれの有利な点と不利な点について多くのことを語りました。

明らかに、この問題はやさしいものではありませんでした。自由民になることには、ある程度、個人面と社会面における利点がありました。実際上それにはしばしば物質面での損失が伴いました。近頃、実に多くの主人たちが——ヘルマスの主人もその一人で——奴隷への全責任を免れるために奴隷たちを解放していました。主人たちのなかには、確かに奴隷たちを解

放はするけれども、そのかわりに、奴隷たちが同じ部署で働き続けること、さらに、以前に付随していた住居や食料の供給をやめることを条件としてつける者たちもいました。ある自由民たちが仕方なく住まなければならぬ小屋はとても粗末なものであり、賃金は不十分であり、彼らの以前の家庭生活が全部崩れてしまうというものでした。日雇い勤労者は少なくとも望む場所に仕事を見つけることができたが、自由民となった奴隷の中には、そうした人々よりずっと貧しい生活を送る人も出てきていました。

* * *

やがて議論は当面の問題に戻りました。両方の立場に関する意見が交わされ、しばらくの間、話は堂々めぐりをしました。

「このことについてパウロが何か言っていたのではないかしら」

と、プリスカがアクラに聞きました。

「そのとおりだ」

と、彼は答えました。

「それはコリントの古い教会に宛てた二つの手紙の一つにあつたと思う」

「どちらの手紙か覚えてる？」

彼はちよつと考えました。

「たしか、第一の手紙の中で彼が結婚と独身生活について語っている箇所にあると思う。寝室のたんすの中に他の書類と一緒にあるから、持ってきてくれませんか」

プリスカが部屋から出ていったその間に、アクラは、このパウロという人物が昔からの友人であること、ローマ

帝国中に集会を始めたこと、そして現在ローマ市のどこかの家に監禁中であり、ユダヤで彼に対してなされた偽りの告発に関する裁判を待っているところであることを、私に話しました。パウロは、彼らの共同生活に影響を及ぼすことがらについて特殊な知恵を持っていました。そういつたことがらについては、彼に個人的に相談するか、あるいは、彼が書いたものを読み返すことが役に立つと、彼らは分かっています。プリスカが戻ってきたとき、アクラは巻物の中のその箇所をととても簡単に見つけ、読み上げました。

多くの場合、パウロは、彼らが自分の現在の身分に満足し、それを変えようとしないうようにと助言していました。

(つづく)

■その二 奴隷に関するパウロの教え

アクラが読み上げたパウロの手紙から考えると、多くの場合パウロは、彼らが自分の現在の身分に満足し、それを変えようとしないうようにと助言していました。すなわち、奴隷である人たちは、それを他の人たちに仕える機会と見なすべきであると言うのです。なぜなら、私たちの社会的地位が何であれ、そうすることが私たちすべての者が負っている基本的責任だからです。

しかし、一般に起こりがちなように、自由になる機会が生じたときには、彼らはためらわずに自由民になるべきです。なぜなら、だれであっても、この新しい状況を正しく受けとめるならば、その人は、他の人を助ける新しい方法を現実に見つけるでしょう。

次に、主人たちには、彼ら自身が実はキリストの奴隷であることを覚えること、奴隷たちには、彼らはとても大事な領域においてはじつは自由であることが、勧められました。

* * *

この助言により、たしかに議論はより意味のある方向に転じましたし、私も自分自身について考えなければならぬ問題があることを知らされました。今や話は、パウロの判断の基準となった原則をめぐって進められました。リユシアスが解放された場合、彼はどうすればもっと充分にアリストブローロスに仕えることができるのか、あるいは、彼の場合、この規則に当てはまらない特別な事情があったのか。こういった

ことについて話をしていくうちに、リユシアス自身もその意見を支持した他の人たちも、アリストブローロスの申し出に対して、より積極的な態度を持ちつつあるように思われました。

しかしリユシアスには考えたいことがまだありそうでした。そう言いながら彼は、次の料理のためにプリスカの手伝いをするため立ち上がりました。

* * *

その短い休止の間に、フィロロゴスは集会の出席者たちに、自分の娘が集会のために小さな出し物を用意したので、今それを披露したいと言いました。夕食の最中にしばしばこういった飛び入りがあるので、私は彼の提案に少しも驚きませんでした。

少女が立ち上がり、皆から見えるように壁のほうに移動したとき、部屋のあちこちから励ましの声が飛びました。「私が作った歌を歌います。神がお造りになったあらゆる種類のものについてです」

小さなグループに分かれて会話が続いていました。小さく分かれるのは、この集会が始まってから初めてのことでした。近くの人たちは、競技場での戦車レースの倫理について議論していました。

出席者たちが積極的にグループに参加しているのを見て考えさせられました。これまで私が出席したことがある食事の席では、しばしば客たちは食事の合間の自由時間を利用して、自分たちをめぐって目下進行中のことから離れ、手紙を書くか口述筆記させる

かしたり、近くにいる人たちと商談をしたり、あるいは時には次の料理までうたた寝をするだけでした。

また、この集会の出席者たちは、食べ物と飲み物の残りを床に捨てることについて、慎み深く自制していることに、私は気づきました。少し床は散らかっていましたが、上品かつ許される範囲であり、ときおり見られるような行儀悪い仕方ではありませんでした。

しかし、宗教の観点からすると、集会全体は、多くの望ましいことをまだやり残しているような気がしてなりませんでした。私が見るかぎり、これまでの出来事はほとんどまったく宗教に關することを含まないませんでした。何と彼らは、祭司さえ持たず、ましてや普通予想される儀式上の礼服などはありませんでした。しかし、たぶんもっと純粋な宗教行為がこの先あるのだろうかと思いました。(つづく)

■その㉔ アリストブローロスの話

この最後の料理の間に、私は再びアクラに話しかけ、もう一度彼のポイントウズ時代のことに話を向けることができました。彼は過去にその地で経験したことや、その地域の現在直接に交流のある人たちのことを語り、私のいろいろな質問に答えてくれました。

しかし、しばらくすると他の人が彼に話しかけたので、私は向かいのアリストブローロスと話をするため身を乗り出しました。話をするうちに、彼はどのようにしてこの集会の人たちと関わるようになったかを説明し始めました。

彼は長い間、私たちの先祖伝来の宗教に疑問を覚えていました。そこで、以前からユダヤ人たちの単一神の強調と彼らの道徳観に感銘を受けていた彼は、ある日、シナゴークへお忍びで入り、これまでのものとは違う本物を見つけたのです。ただし、完全にユダヤ教に改宗したというわけではありません。食物に関するいくつかの規定と、割礼の習慣——私には野蛮に思われま——とが、彼の深入りを踏みとどまらせていました。彼は、友人たちの間では、シナゴークとの関係話さないうようにしていました。彼の妻は強く反対していましたが、自分の社会的立場と政治的忠誠が疑われると困るので、だれにも話しませんでした。彼はアクラとプリスカに出会ってから、シナゴークのかわりにこの集会に結びつきました。彼の奴隷は納得して入会していましたが、彼はその集会には何かがあ

るということを妻に説得できずにいました。

この時点で、私たちの話はリュシアスにさえぎられました。彼は、アクラの合図で私たちのテーブルの杯にワインを再び注いでいました。もう一つのテーブルでは、フェリクスが同じことをしていました。

* *

それから、アクラは両手に杯を取って、言いました。

「私たちが飲んでいるワインは、私たちの食事の一部であり、主にある私たちの交わりを助けるものでした。しかし、ワインはそれ以上の意味を持ちます。というのは、それは、イエスが説明したように、彼が死によってこの絆を創った方であることを、私たちに思い起こさせてくれるからです。それはまた、私たちにとって、やがて彼と持つであろう交わりの約束です。そのとき、私たちは彼の食卓に着き、顔と顔を合わせて彼と共に食事をするのです。ですから、私たちが共にこの杯にあずかるとき、これらのことを心に覚え感謝しましょう。一方のことを感謝をもってふり返り、他方のことを期待をもって待ち望みましょう。そして、私たちの集まりが、私たちがこの方と一つであることをさらに深く表わし、いわば、地上におけるささやかな天の味わいとなりますように」

こういう精神で、私たち全員はワインにあずかりました。

今や食事は事実上終わったので、いろいろな客たちが、満腹のげっぷをも

って感謝を表わしていました。無礼にならないように、当然私も同じことをしました。プリスカとアクラは、私たちの感謝の表現を当然喜んでくれたと見え、軽い会釈でそれに応答しました。

子どもたちと奴隷たちが退出し、客たちが足を伸ばすために立ち上がったとき、プリスカは、テーブルの上にある受け皿の形をした陶器製のランプの油を調べ、しんの長さが適当かどうかを確かめました。しかし、暗くなるまでまだ少し時間があったので、彼女はすぐにはランプに火をともしませんでした。皆知っているように、油はとても高価なので、無駄にするわけにはいかないのです。

(つづく)

■その「F」 食後のひととき

子どもたちは皆、どこかからチェッカーゲームを取り出し、部屋の向こうの隅に座っているリュシアスのまわりに集まっています。年上の女の子の一人が、まるばつ遊びセットをもってきており、また2人の少年が羊の手骨を使った遊びを始めました。私はぶらりとそちらへ行き、何とかして勝ちたいそぶりをしながら上手に負けるリュシアスの手並みに引き込まれながら、しばらくの間観戦していました。彼が負けると耳につく喜びの歓声が上がったので、親たちは、静かにさせるために「しっ！」という合図を送りましたが、ちよつと静かになっただけでした。

一方、客たちは、再び寝椅子に集まっています。1、2名は、部屋を出ていました。おそらくトイレを探していたのでしょう。この場所はまさに幸運といふべきで、1階のトイレを他のアパートの住民たちと共有していました。

私は自分の寝椅子に戻り、夕食が終わった今、これから何が起ころのだろうと思ひ始めました。普通、この時間は一般的な話に使われます。冗談や物語を語るやら、道徳の話題や本の一節に関する議論やらです。ワインがどんどん注がれ、話がはずみます。私たちの杯は片づけられていたので、もうこれ以上ワインは出ないだろうと思ひました。しかし、それ以上のことは分かりませんでした。

私は体を楽にしようと思ひ、寝椅子の上にあるクッションの一つに寄りかかり、スリッパを脱いで、足を大理石の床につけました。アクラとプリスカくらいの財力の家庭の場合、通常予想されるのはテラコッタかセメントの床だろうと思ひます。しかし、元来ここは貴族の家だったので、この点でも彼らは幸運でした。部屋は明らかに快適なものでした。片側にはカーテンのついた飾り格子のある窓が一定の間隔で並んでおり、部屋の一つの壁沿いに充分な光を採り入れました。いくつかのつづれ織りと壁掛けが、白いしつこい壁を飾っていました。デザインは並みのものではありませんが、とてもよく作られていました。寝椅子とテーブルは、節度のあるものでした。裕福な家庭に見られる美しい木目塗りの木材や入念な彫刻をほどこした木細工のかわりに、ここでは低い木製のテーブルには最近とても流行っている取り外し自由の金属製の脚がついているだけであり、寝椅子の頭板は非常に素朴なデザインでした。それらを覆っている織物は、上等ではありませんが良質のものであり、刺繍はぜいたくというよりはむしろ手の込んだものでした。

* * *

皆が席に着き、リュシアスがゲームを片づけたとき、アクラは頭を少し垂れ、彼の神の靈に、今起こっているすべてのことに導きがあるようにと願ひました。彼はこれを、とても簡潔にしかも当然のことのように行ないました。

それから少しして、彼は、私たちが歌を、すなわち子どもたちが特に好きな歌を歌うことを提案しました。皆はこれに賛成しました。美しいバリトンの声を持つガイユスが歌い始め、すぐに皆が加わり、子どもたちは手を叩きながら歌いました。この私も、しばらくしてから、何とか歌に加わりました。私にとってよい歌を歌うことほど楽しいことはありませんが、これほど歌にひたる機会はこれまでめったにありませんでした。私たちは、最後のコーラスでは、もう少しでたる木が外れるのではないかと思うほどの声で歌いましたが、隣に住む人たちはどう思ったでしょうか。

(つづく)

■その56 テュロの涙

歌が終わるとすぐに、クレメンスが目を閉じて彼の神に祈り始めました。彼もアクラと同じように、まったく普通に話しました。あたかも彼の神が同じ部屋にいる親しい顔見知りであるかのようにです。クレメンスは神と会話をすることで、歌の中に何回も出てきたあることを繰り返しました。それは、世界が神から私たちへの贈り物だということですよ。奇妙な考えだと思いませんか？

彼はこのことについてかなり詳しく語りました。私たちが毎日使ったり、見たり、聞いたり、かいだりしているあまりにもしばしば当たり前だと思っていることが、神の手から来ているのだということについて、彼はとても詳しく語りました。

クレメンスが語っている間、部屋にいる人たちの口からときおり同意を示すつぶやきがもれました。最後に、グループ全体から「ほんとうに（アーメン）！」の大声が上がりました。

他の人たち、すなわち男性たちだけではなく女性たちも、さらに子どもたちの一人さえもが神との会話をしたとき、同じ形式が繰り返されました。クレメンスのものと同じくらいの長さで神との会話をするものもいれば、わずかな数語の会話もありました。ほとんどは、クレメンスが最初の歌から抜粋した主題を何らかの仕方で行ったものでした。

たとえば、ある時点で、例のユダヤ人織工が、彼の祖先たちに対する寛大さのゆえに神に感謝し、彼らを他の民族から区別する数多くのことを枚挙しました。しかしまた、いつもそれに報いることができなかつたことをわびました。

また、とてもためらいがちな1、2行の言葉がテュロの口から出ました。その中で彼は、神がどれほど多くのことを自分のためしてくれたかを、特に、ただ一人の息子を贈ってくれたことがついに分かつたことを、彼の神に感謝しました。

これが終わったとき、その場にいたそれぞれの家族の長たちと、他の1、2名が、彼のところへ歩み寄り、彼の上に手を置きました。こうして、彼を自分たちの共同体の交わりの中に歓迎し、今後彼を支えることを約束しました。彼は実際これにより感激の涙にむせび、ほとんど彼らに感謝を言い表わすことができませんでした。奇妙な場面ではありましたが、私自身も少し感動したことを認めないわけにはいきません。

彼らがもとの席に戻ったとき、ヘルマスは、聖なる書の中に特にこの場に適切だと思われる一編の詩があると書いていました。彼は、こういつたことについてよく記憶していたに違いないと思います。というのは、朗唱は数分にも及んだからです。

「この写しがほしいですか」

朗唱を終えると、彼はテュロに聞きました。

「あなたのために書き写してあげるのは、簡単です」

テュロはうなずきましたが、私が見るところでは、彼は今しがた起こったことと、皆から受けている注目のゆえに、まだ少し圧倒されていました。

* * *

それからのしばしの休止の間に、プリスカは立ち上がり、ランプの火をともしました。もう外はほぼ暗くなっており、私たちはお互いに部屋の向こうにいる人がほとんど見えませんでした。

彼女がランプの火をともしている間、ヘルマスが、聖なるユダヤ教の書物にある話を語り出しました。ダビデという名の昔の偉大な英雄についての話でした。ヘルマスの話しぶりから見て、彼らは集会に出席するたびにその人物の生涯のいろいろな部分について聞いていたようです。彼はたしかに、分かりやすい話をするコツを心得ていたと思います。というのは、彼が話している間、子どもも大人も、ここにいるだけ一人として物音を立てる人がいなかったからです。この後、もう一つの歌が続きました。今度はアリストブロースの提案でした。

(つづく)

■その56 賜物を使うこと

それから、アクラが話し始めたとき、一同は再び静かになりました。彼が最初に語ったことは、神の霊は今だからでないほど多くの賜物を与えたので、だれもが一つか二つの賜物を受けている、ということでした。すなわち、私たちが互いに対して語ることができない賜物もあれば、私たちがお互いのために行なうことができる賜物もあります。ある人たちは、神のことや、お互いのことや、社会でのもろもろの責任についてすぐれた理解を示します。ある人たちは、問題をもつ会員を個人的に助けたり、会員たちが調和と絆をもつグループになるよう一つに結び合わせたります。ある人たちは、お金に困っている人たちを助けたり、病気のような体に関する必要に対応したりします。ある人たちは、言いたいことを神に伝えることができない人たちや、他の人たちから伝えられたことがあまりにも感情に響きすぎて普通の言葉に移し換えることができない人たちのために説明をしてあげます。

これらはすべて、独り占めや自己満足のためではなく、他の人たちと分かち合うためのもので、それらの賜物は、ここにいる一人ひとりが、そしてグループ全体が、生活のあらゆる面で成長するための共有財産だということです。そういうわけで、一人ひとりが自分だけのような能力が与えられているかを発見すること、それらをいつどのようにして行使するかを見分けること、他

の人が賜物を行使するとき、どれだけの真理が、または単なる個人の意見が含まれているかを注意深く吟味することが大事なのだということです。

「とりわけ」

と、アクラは強調しました。

「私たちは、神の言葉を互いの役に立つように、そして適切な仕方でも語るといふすべての賜物の中で一番大事な賜物を用いることを願うべきです。また、そこに存在する一番大事な徳を、すなわち、真実の愛をもって互いの世話をすることを求めるべきです」

彼は、その場にいたすべての人たちに、これを用いるようにと直接に勧めて、話を終えました。

「私たちの幸せはひとえに、個人であれグループであれ、この賜物を用いることにかかっています」

と、彼は厳粛に言いました。

* * *

彼が話し終えたとき、一同はしばらく黙っていました。私は少しも驚きませんでした。彼は、人気のある道徳教師たちに見られる、ありきたりの修辭的美辭麗句を使わないで話していましたが、彼の言葉には打ち消しがたい力をこもっていました。彼が話したことを全部理解できたわけではありませんが、わたし自身もそれを感じました。この沈黙の間、フィロロゴスの家族の末娘が母親の腕の中で眠っており、もう一人の娘がその兄弟の一人に半分眠った状態で寄りかかっていることに、私は気づきました。閉じられたカーテンのすきまから微風が入ってきて、ラ

ンプの火をゆらめかせ、その煙がのんびりと渦を巻いて空中に上りました。四方の壁には、私たちの体を映す巨大な影が、光のリズムに合わせて伸びたり縮んだりしていました。外は、昼間の終わりを告げる鐘が鳴った後、町に流れ込む激しい交通の音がだんだんと増してきました。この部屋の窓は通りにはなく内側に面しており、壁も丈夫に作られていたので、ちょうどよかったです。さもなければ、話を聞き取ることがとどろき難しかったかもしれません。

(つづく)

■その二 織工の妻

織工の妻が話し始めました。

「ここに座ってアクラの言ったことを考えているうちに、初めにここにいる全員に、次に、特定の一人に私が何かを語るように神が望んでいることを知りました。神は私たちが分かち合うためにもっと多くのものを賜わり、私たちが今経験する賜物をさらにいっそう役立つものにしてくださいます。それを私たちが知ることを神は望んでいます。私たちが自分のために賜物を求めるなら、このことは起こりませんが、私たちがひたすら互いに仕え合うことに専心するなら、このことは起こりません。もし、私たちが進んでこのことを行なうなら、私たちのグループの外においても、私たちが主に心を向けてほしいと願っている人たちの間で、私たちの賜物を使う機会を見いだすでしょう」

賜物を使って互いに仕え合うということについて、織工の妻はさらに言いました。

「特にリュシアスさん、アリストブローロスがあなたに与えようと願っている自由の結果としてこのことが起こるということ、あなたが確信するように神は望んでいます。それによって、あなたははるかにいろいろな仕方です。アリストブローロスに仕えることができるようになるばかりでなく、今のところあなたにはできない仕方、他の人たちに仕えることができるようになります。」

ですから、あなたは確信をもって早速この歩みをなすべきです」

彼女が語り終えると、想像できると思いますが、先ほどの議論があった後なので、彼女の話に対する反応は、概してとても肯定的でした。

一息ついた後、ガイユスが立ち上がり、祖母のマリヤのところへ行きました。彼は彼女のそばに立ち、その頭を手を置き、他の人たちにも彼女のために一緒に祈ってくれるように頼みました。それから、彼は、彼女のために神のいやしの力を求めるとともに、先週のうちに彼女の健康が改善したことを神に感謝し、これが完治するように引き続き願いました。

* * *

このようにして、このグループではさまざまな人たちが、互いの生活のさまざまな面のために、次から次へとあらゆる種類の祈りをするのだと思われました。正直に言うと、このことが続いたとき、私は少し眠くなってきましたが、おそらくランプの煙のためであり、何か他の理由によるものではありませんでした。

もつとも、なかには長すぎると思われる祈りもありました。私の印象では、クレメンスも何度かそのように感じていた様子で、ややじりじりした感じでスリッパをあちこち動かしたり、あきらめたようにため息をついたりしていました。しかし最後にアクラが、皆が知っている短い別れの歌を歌うことを提案し、集会を終わりに導きました。

私たちはその歌を歌い、集会は終わりました。

* * *

ところが完全には終わっていませんでした。というのは、以前にクレメンスが、いったい集会はいつ本当に始まったのだらうと、私に語ったことを思い出したからです。

フィロロゴスとその妻は、彼らをもてなしてくれた主催者夫妻にただちにおやすみのあいさつをし、子どもたちと一緒に退出しました。プリスカが彼らを見送りに行きました。2番目の家族も、夜が更けたので帰らなければならぬと言いながら、別れを告げました。これら2組の人たちは、家を出る時に私のところに来て、ローマでの滞在が祝福されたものとなるようにと言い、一方の人たちが私を次週の夕食に招待してくれました。私はそれを受け入れました。

(つづく)

■その二 帰り道

他の人たちはそのまま残り、小さなグループに分かれて話をしていました。プリスカは戻ってきて、彼らにワインを出しました。部屋の片隅でアリストブ羅斯が何やらヘルマスと議論しており、ヘルマスの抵抗を無視して、ひそかにお金を渡そうとしていることに、私は気づきました。

2人の奴隷も別れを告げ、アクラは彼らを広間からドアまで案内しました。私たちも帰る決心をして、広間までついていきました。その2人がまさに出ていこうとした時、私たちの前にいたプリスカは、彼らを呼びとめ、残りの食べ物がたくさん入った二つのナプキンを彼らの手に押しつけました。彼らは去り、私たちもお別れを言い始めました。私は、招いてくれたことを主人に心から感謝しました。彼らは、私がローマに滞在している間はいつでも、またクレメンスとユーオディアと共に来てくれることを歓迎しますと、私にはつきり言いました。私たちがサンダルを受け取った後、私を除いてすべての人たちが別れの口づけをし、アクラとプリスカもそれをしながら、彼らを神の恵みに委ねました。それから、私たちは外套を取って肩にかけ、夜の外に出ました。

外は真っ暗でした。月が満月に近く、かなり高く上っている場合は別ですが、私たちの首都の道は特別の場合しか明かりが灯されないのです、通常は道を通り抜けるのがいつもむずかしいのです。

真っ暗な通りには、私たちの前にいる、声は聞こえるが見えない2人の奴隷以外には、通りにはだれもいないようでした。ほとんどの人たちは、もう何時間も前に眠りについていました。というのは、私たちローマ人には、早起きをして昼の光を最大限に利用する習慣があるからです。夜にゆらめくランプや煙に満ちた部屋は、どうてい夜更かしをする気にさせません。

「フェリクス」

と、クレメンスは奴隷の一人に呼びかけました。

「行けるところまで一緒に歩いていこう。そのほうが安全だ」

他の人たちも同意し、私たちが追いつくのを待ってくれました。その時、アリストブ羅斯も、私たちの後ろの戸口から現われました。

「あなたたちがあまり遠くに行っていないかればいいと思っていました」

と、彼は言いました。

「リュシアスがたいまつをもっていきますので、私たちが一緒に行けば、全員がその益にあずかることができます。私たちには少し遠回りになりますが、問題はありません。私たちのことなら心配いりません。そうだね、リュシアス」

この申し出は、うれしいものでした。ローマは、夜間はどろぼうや追いはぎで悪名高いところですよ。言うまでもなく、いたるところに野犬が、あるいは豚さえも野放しで走り回っています。狭い通りでは行く手がよく見えないので、昼間の終わりを告げる鐘が鳴った

後に町に出入りする荷物を積んだ大きな荷車にひかれてけがをしたり、時には死んでしまったりすることもありません。警戒しなければならぬのは、これらだけではありません。いまでも、とても多くの人たちは、だれも見えないとき、夜間に汚水おけやトイレ用なべの中身を窓から投げ捨てていました。これについても、実際上どうしようもありませんでした。夜間に外出するときには、祈るような気持で最善を願うしかありませんでした。

* * *

私たちは歩いていました。他の人たちは、今夜の出来事についてあれこれ語り合っていました。

私はその日の午後に出かけたときから起こったことを思い返しました。私の予想とはとても違うものであることが分かりましたが、おおむねその夕べを楽しんだと言わなければなりません。そこにいた人たちがたしかに私の印象に残ったというのは、一つ言えることです。彼らが無視したいくつかの礼儀や、彼らが抱く信念や、彼らを支配する熱狂については疑問が残りますが、食事中の彼らのやりとりには何か感じるものがありました。食後においてさえ、そうでした。彼らのふるまいには、まぎれもなく本当の何かがありました。しかし、彼らの集会は、宗教の観点からすると、とても不十分であり、彼らが行なつたいくつかの珍しいことについては、とても当惑しました。次週も出席してほしいというアクラとプリスカの招待に、はたして応じたものだら

うか。それはむずかしい判断です。今はまだ分かりませんが、もしかしたら行くかもしれないと思いました。

(終わり)